

十日ほどたって、ごんが、弥助やすけというお百姓ひやくしやうの家の裏を通りかかりますと、その、いちじくの木のかげで、弥助の家内かないが、おはぐろをつけていました。鍛冶屋かじやの新兵衛しんべえの家のうらを通ると、新兵衛の家内かみが髪をすいていました。ごんは、

①

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓たいこや笛ふえの音がしそうなものだ。それに第一、お宮みやにのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十ひやうじゆうの家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢おおぜいの人があつまっていました。よそいきの着物を着て、腰こしに手拭てぬぐいをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいっています。大きな鍋なべの中では、何かぐずぐず煮にえていました。

② 「ああ、葬式まうしだ」と、ごんは思いました。

「兵十ひやうじゆうの家のだれが死んだんだろう」

お牛ひろがすぎると、ごんは、村の墓地もくちへ行って、六地藏ろくじざうさんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向うには、お城やねの屋根瓦がわらが光っています。墓地には、ひがん花ひがなが、赤い布きれのようにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘かねが鳴って来ました。葬式まうしの出る合図あいずです。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声も近くなりました。葬列は墓地へはいって来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがって見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌をささげています。いつもは、赤いさつま芋みたいな元気のいい顔が、きょうは何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母だ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおつ母は、床とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままおつ母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちよッ、<sup>③</sup>あんないたずらをしなけりやよかった。」

問い一

——①「村に何かあるんだな」とありますが、ごんは何を見てそう思ったのですか。二つ書きなさい。

問い二

——②「兵十ひょうじゅうの家のだれが死んだんだろう」とありますが、兵十の家のだれが死んだのでしょうか。

問い三

ごんは葬列を前から見ていますか。後ろから見ていますか。

問い四

——③「あんないたずらをしなけりやよかった」とありますが、ごんはどんないたずらをしたのでしょうか。